

「日本男子マラソンが金メダルにもつとも近づいた日」^①..

一九二八年五輪アムステルダム大会マラソン競技における「人種」^②表象の考察にむけて

川島浩平

はじめに

二〇〇八年度に私が着手した武蔵大学総合研究所助成プロジェクトAは、三年間の研究調査を経て、その目標を次のように絞り込んできている。^③すなわち、「黒人」と呼ばれる人間集団に固有の運動能力があるとする想定を、科学的根拠が存在しないにもかかわらず一つの言説として広く受け入れられていることを根拠に「神話」として規定し、この神話^④が出現し、伝播してきた経路を解明し、「黒人身体能力神話の浸透」^⑤。「歴史的、文化的に構築された現象」に生得的、遺伝的根拠があるとすると想定を批判的に再検討することである。

これまでに、この目標を達成するために二つの立場を設定してきた。その第一は、「神話」の浸透を国際的な広がりをもつ現象として捉え、その起源と形成・普及の過程をグローバルな視点から、とりわけスポーツ大国として、これまで多くの「黒人」アスリートを産出してきたアメリカ合衆国（以下アメリカ）の占める役割と位置に注意を払いつつ、明らかにしようとするものである。^⑥第二は、「神話」の浸透におけるすぐれて日本的な、つまりにグローバルな水準に照らすと日本においてきわめて無批判に「神話」が受容される状況に注目する立場である。^⑦

第二の立場からの調査の成果を、私はこれまで幾度かに分けて発表してきた。^⑧本論もまた、この立場をとるものであるが、先行研究とは異なる

り、「きわめて無批判に『神話』が受容される状況」が出現する歴史的過程に踏み入ろうとする点で、新しい角度からのアプローチをこころざしている。つまり、先行研究では、日米の比較的な枠組において、アンケートとインタビューに基づく質的調査によって、現在を生きるインフォーマントのライフヒストリーをたどりつつ、一人ひとりが積み重ねてきた経験のデータから、神話に対するポジションの固有性が生まれる原因を明らかにしようとしてきた。これに対し、本論は、明治以降の近代の日本史をさかのぼり、身体能力において「黒人」を頂点とする「人種」的序列（あるいは「人種」的ヒエラルヒー）の意識や思考が構築される時期・時代とその環境に分析の眼を向けることをねらいとしている。近代という歴史的文脈に立ち入ることによって、「神話」の形成過程を段階的あるいはより立体的に炙り出そうとする意図がここにある。

右にいう「身体能力において『黒人』を頂点とする『人種』的序列の意識や思考の構築」を、すこし広い視点から言い換えるなら、「人種」という概念による社会の構造化および序列化の一端をなすものとして捉えることができる。このような構造化および序列化は、いつ、いかにしてなされたのか。その背後にはいかなる要因が作用していたのか。そしてそれはいつ、いかに変容してきたのか。これらの問いは、一九八〇年代、九〇年代に相次いで発表された著書において、M・オーミとH・ワ

イナンが投げかけ、アメリカという国民国家の文脈において、その答えを見いだしたものであるといつてよいであろう。オーミ／ワイナンは、「人種」そのものの性質や特徴から、社会が「人種」によって構造化され序列化される過程に視点を移し、この過程を「レイシャル・フォーメーション (racial formation)」＝人種的秩序・序列の形成」と呼んだ。そしてそれが成立し、変容する原因と文脈を突き止めることを目的とする研究を提唱したのである。⁽⁸⁾

我が国でも、オーミ／ワイナンに呼応しつつ、西洋的なパラダイムを批判的に再検討し、非西洋地域の歴史的、文化的状況をも視野に入れた位置から、「人種」に正面から取り組む研究が集積されている。こうした研究にみられる共通点として、「人種」という概念を科学的根拠のない虚構として切り捨てるわけでも、むしろ客観的、固定的な事実として受け入れるわけでもなく、私達の社会的世界を構築し、表象する基底的な役割を果たすものと認めた上で、分析の対象として受け入れる意欲と姿勢を指摘できる。⁽⁹⁾

本論もまた、「身体能力」という限定がつかとはいえ、「黒人」を最高位に配置する「人種」的な秩序あるいは序列が形成される過程に着目し、それがなぜ、いかになされ、変容を遂げたのかを問う点で、上に述べた学術的な脈絡に位置づけることが可能である。「黒人身体能力神話」の起源を求める研究は、かくして「レイシャル・フォーメーション」の一面を切り開く作業を伴うものといえるのである。したがって、私の取り組む武蔵大学総合研究所助成プロジェクトAの目的は、「身体能力」という制約された、しかし独自の視点から、アメリカと日本それぞれにおける「人種」的序列の形成過程を検証し、両者の近現代史を読み直す

ことと言ひ換えることが可能である。⁽¹⁰⁾

身体能力における「人種」的序列の意識や思考の起源を探る作業に着手するため、さしあたって、M・ダイレソンが提案する一九二八年のオリンピック、アムステルダム大会マラソン競技における「人種」言説・表象の国際比較研究に注目したい。⁽¹¹⁾ この競技は、オリンピック史上初めて、非白人ランナーが優勝の栄冠を手中にした国際試合として知られる。その人物とは、アルジェリア系フランス人A・B・エル・ワフイ (Ahmed Boughera El Ouafi)。日本人の山田兼松と津田晴一朗も四位、六位の入賞を果たした。ちなみに、二位はチリ人M・プラザ (Pizarra)、三位はフィンランド人M・B・マルッテリン (Martelin)、五位はアメリカ人J・レイ (Ray) であった。上位六名の国籍および「人種」に注目するならば、近代オリンピック開始以来長く「白人至上主義 (ノールデイズム ≡ Nordicism)」によって特徴づけられてきた「人種」的秩序を根底から覆す結果であったことは明らかである。

一九二〇年代後半 (昭和初期) になると、宗主国対植民地、先進国対後発国、西洋対東洋など、地域・国家間を結ぶ関係性の糸が複雑に絡み合い、激動する国際情勢の中で、各国における「人種」的な秩序と序列を認識するパラダイムも動揺し始めていた。そんな時局にあって、かく達成されたオリンピック史上初の快挙は、既存のパラダイムによる規制や拘束を破りつつ、これを攪乱し、なお一層動揺させる役割を果たさなかったはずがない。とりわけ、人間の耐久力を極限に近いレベルで競い合うマラソンという競技は、その意味において「最強の国民」あるいは「人種」を決める闘いという性質を帯びていた。それゆえ、オリンピックでの記録は、陰に陽に伝統的な人間観や「人種」的優劣の順位を逆転

し、再編成する契機となる可能性を有していた。またそうするための政治的、イデオロギー的な変革を志すものにとって、高い価値を有していたはずである。アムステルダム大会にかかわった人々が残した証言や記録が反映する「人種」的な表象や言説を精査することは、「人種」的認識のパラダイムの連続性と変化の中に、一九二〇年代後半という時代を位置づける上で、きわめて有意義な貢献をなすものと考ええる。

単純化を恐れず述べるなら、明治初期以来、アムステルダム大会前夜までに日本人の間で明に暗に了承されていた「人種」的ヒエラルヒーは、上から白人・「黄人」⁽¹⁴⁾・「黒人」の順をなす三段の構造を主たる特色としていたといえる。それは、明治維新そして「文明開化」という西洋へゲモノーによる衝撃と適応の時代に、福沢諭吉をはじめとする啓蒙思想家が積極的あるいは消極的に受容し、普及させ、明治後半のナシヨナリズムの高揚や大正デモクラシーを越えて存続してきた構造でもあった⁽¹⁵⁾。昭和三年に開催されたアムステルダム大会マラソン競技は、この構造と全く矛盾する序列を観衆に突き付けたのである。

「有色人種（アフリカ人）」のエル・ワファイが首座を占め、同じく「有色人種（アジア人）」の二人が入賞した。（二人を入賞させたのは日本のみで、すくなくとも日本のメディアは、この成績が銀メダルに優ると声高に主張した。しかも、以下にみるように、ゴールから二キロほど手前まで、その一人である山田が、首位を独走していたのである。）「白人・黄人・黒人」という伝統的なヒエラルヒーは、人間を他の動物から決定的に分かつ身体能力、つまり二足による長距離走行⁽¹⁶⁾での耐久性をためす（すなわちもつとも優秀な「ヒトの種」を確定しようとする）競技を通じて得られた「黒人・黄人・白人」という順位によって、明白な反例を

提示されたといえるだろう。

しかし、管見の限りだが、日本の学界はこうした観点からの考察に取り組んでこなかった。それどころか、山田と津田の好記録でさえ、一部の専門家によってかろうじて記憶にとどめられてきただけで、一般人々に顧みられることはほとんどなかった。一九二八年の大会といえ、織田幹雄（三段跳び）と鶴田義行（二〇〇M平泳ぎ）による日本五輪史上初の金メダルと、人見絹枝（八〇〇M走）による日本人女性初の銀メダルの獲得が注目的であり、その陰で二人の長距離ランナーは忘却された。しかし、上に述べた理由から、山田と津田の力走は、そしてライバルたちとの競走の全貌は、是非とも、歴史学的な検討に付されるべきなのである。⁽¹⁷⁾

ただし本論は、日本の近現代史を文脈として、身体能力における「人種」的序列の意識や思考の起源を探る作業の、序論的な役割を果たすにとどめざるを得ないことを断わらなければならない。より具体的には、以下において次のような点の検討を試みるものとする。すなわち、アムステルダム大会の日本オリンピック史における位置づけ、マラソン競技の展開と結果、競技結果の分析とその評価、優勝者エル・ワファイに対する日本を含む各国の意見と態度などである。こうした点を本論で明らかにすることによって、「人種」的ヒエラルヒーに関わる解釈上の諸問題⁽¹⁸⁾について考察し、「黒人身体能力神話」の日本における起源を突き止め、延いては「人種」的序列の意識や思考の歴史の全容を詳らかにするために布石を敷くものとしたい。

1. 日本オリンピック史における 一九二八年アムステルダム大会

日本人選手が最初にオリンピックに出場したのは、一九一二年第五回ストックホルム大会のことである。¹⁹⁾この時、三島弥彦が一〇〇、二〇〇、四〇〇Mに、金栗四三がマラソンに出場したが、成績は振るわなかった。その後、一九二〇年第七回アントワープ大会では、熊谷一弥が硬式テニスシングルスで二位、熊谷と柏尾誠一郎がダブルスで同じく二位となり、銀メダル二つを獲得した。これが日本選手最初のメダルであった。このような前史を経て、二八年の第九回アムステルダム大会は開催される。この時選手団は、すでに述べた日本人初となる金メダル二個に加え、銀二個、銅一個を獲得した。

メダル獲得数の急増に国民は沸いた。時は昭和三年、いわゆる「昭和維新」を経て成長を続ける国家の人々は、国際社会での一等国として地位を揺るぎないものとすべく、主要国の代表がしのぎを削るスポーツの祭典でも、さらなる躍進を望んでいた。アムステルダム大会での成績は、そうした世論に十分応えるものだったはずである。その後日本選手団は、第十回ロサンゼルス大会（一九三二年）、第十一回ベルリン大会（一九三六年）で水泳・陸上競技を中心に大活躍をみせ、さらなる国際的な注目を浴びることになる。したがってアムステルダム五輪は、戦前日本スポーツ界の黄金時代への序曲を奏でた大会だったといえるだろう。

本論の主旨からそれるが、アムステルダム大会と切り離せないエピソードに人見絹枝の活躍がある。日本人女性として初めてオリンピックへ

の出場を果たした人見は、期待された一〇〇Mの準決勝で敗退すると、急遽コーチ陣を説得して八〇〇Mへの出場を認めさせ、なみいる強豪に挑んで二分一七秒六で二着となり、堂々銀メダルに輝いた。この決勝戦は、選手の多くが失神して倒れ込む壮絶なもので、その後五六年のメルボルン大会まで女子八〇〇Mが競技種目からはずされる原因となった。人見の傑出ぶりは、その後日本人のオリンピックトラック競技でのメダリストが、二〇〇八年の北京オリンピックにおける男子四×一〇〇Mリレーで銅メダルを獲得するまで、八〇年もの間出現しなかったことから窺える。人見の功績はその後語り継がれ、有森裕子など数多くの女性アスリートに勇気と希望を与えた。²⁰⁾

やや繰り返しになるが、国際スポーツ競技大会における日本の位置という観点からみるなら、アムステルダム大会が一つの画期をなしたことは疑いない。だがこの大会は、スポーツ界のみならず、国家にとっても大きな意味をなしていた。明治維新以後、「文明開化」、「富国強兵」などを国策として掲げ、急速な近代化を果たした日本政府は、一九世紀末から二〇世紀初頭に、日清・日露という二つの戦争に勝利を収め、アジアの新興国家としての国際的地位を固めた。その経路にあって、身体強健な国民をつくることは「富国強兵」の「強兵」に直結する課題でもあった。それゆえ教育者たちは、明治初期から活発にこれに取り組んだ。海軍兵学寮での「競闘遊戯会」（一八七四年）、札幌農学校での洋風運動会（一八七八年）、東京大学での運動会（一八八三年）などはいずれも、西洋からの知識と指導にもとづく身体的訓練が制度化されつつあったことを窺わせる。²¹⁾西洋的な体育指導によって、江戸的な身体感覚や身体技法は、次第に近代国民国家の民にふさわしい身体感覚・技法の習得にと

もない変容を余儀なくされた。

おりしも、フランス人ピエール・ド・クーベルタンの主導するオリンピック運動が開花して、一八九六年に第一回大会がアテネで開催される。当初この運動に乗り遅れた観のあった日本政府も、次第に関心を高め、すでにみたように、大日本体育協会を介して第五回アムステルダム大会に、三島、金栗二人の代表選手を派遣するに至るのである。オリンピック大会は、日本人の身体と技法が国際的に通用するか、日本人が国際人として成熟し西洋人と台頭になったか、延いては日本が一等国としての地位を確立したかどうかを測る恰好の舞台となった。教育・体育界の関係者のみならず、政財界の指導者が注目し、熱い視線を送ったのはそのためである。

国際オリンピック委員会および大日本体育協会会長を務めた法学博士、岸清一がアムステルダム大会の二年後（一九三〇年）に発表した次の声明に、体育教育関係者の頂点に立ったものの意見として耳を傾けたい。

抑抑スポーツの要は、国民の武士的精神を養成し、その元氣と活力を増進するに存するものにして、即ちスポーツは智徳と体力との渾然たる調和發達を理想とす。故にスポーツ盛んならざればその國は興らず、滅亡の日は刻々之にせまるべし。殷鑑は遠からず、我が國に隣接せる二大國に対すれば思半にすぐるものあるべし。國際オリムピック競技は、スポーツの發達を助長すると同時に、スポーツを通じて各国民間の了解と親善を謀るに在り。我が國が國際オリムピック競技に参加してよりここに十六年。爾來我大日本体育協会が日本國を代表し日本オリムピック委員会としてこの大会に選手を

送ること茲に四回、その間幾多の失敗を重ね辛苦研鑽を積み、今回その苦心は遂に酬いられて水陸両競技に各一個の一等賞を得、アムステルダム・スタジオンのメインマストに、光輝ある日章旗が翩翻として翻り、嚙喰たる君が代の国歌が吹奏せられ、満場の子女が悉く起立脱帽して敬礼をなしたる光景は、真に感激に満ちたるものにして、現場に在りし我々は皆喜涙を禁ずる能はざりしなり。蓋し國民諸君も亦当時此の吉報に接せられたる際、同一の感に打たれたるなるべしと信ず。

我水泳は全体において世界第二位、陸上競技は第八位の好成績を占め、又唯一の婦人選手たる人見嬢の活躍せるあり、之によりて世界列強をして極東に日本なるスポーツの一大新興國ある事を認識せしめたるは、真に痛快の至りなり。

元來スポーツの目的は、各自最善の努力を盡してその技を闘わすにありて、勝敗は深く意に介すべきものにあらずと雖も、その勝利はすなわち國民元氣の優越性を示すものなれば、我國が此平和戰に好成績を挙げたる結果、我が國に対して列國の國民は隱然深甚なる敬意を表すべきは当然にして、その敬意の表現は枚挙するに遑あらず。而も我が國が正々堂堂として此好成績をあぐるを得たる事は誠に慶賀せざるべからず。

我々はかくのごとくして好成績を得たりと雖、決して現状に甘んじまたは慢心すべきにあらず、所謂油断は大敵なり、今より二年後の米國ローサンゼルスに開かれるべき第十回國際オリムピック大会には、列國選手がさらに修養を積み試練を重ねて捲土重来すべきは当然にして、之に対して我々は深く備えざるべからず、特に米國は

従来士氣の旺盛をもつて名あり。之に加ふるに地の利と金の力を以てす。之に対して優勝の位置を得んとするには我が国は非常なる覚悟と熱心なる練習を必要とす。況や欧米列国の黙々としてしかも孜孜として倦まざる練習と準備とは決して軽視すべからずにおいておや。

この声明は、『第九回国際オリムピック競技大会報告書』の「序言」として寄せられたものである。その冒頭で岸は「スポーツは智徳と体力との渾然たる調和を理想とす」と述べ、ローマの詩人ユウエナリスによる「健全なる精神は健全なる身体に宿る」との主張、あるいは東洋思想でいう「文武両道」を彷彿とさせる立場を明示し、スポーツにおける精神と身体の均衡と両立の意義を説いている。これは、昭和初期における知識人のスポーツ理解のありかたを示唆する記述として興味深い。しかし同時にこの声明は、アムステルダム大会を日本スポーツ史上に位置づけるための参考としても多くの示唆に富むものである。

岸は「我が国が国際オリムピック競技に参加してよりここに十六年。爾来我大日本体育協会が日本国を代表し日本オリムピック委員会としてこの大会に選手を送ること茲に四回、その間幾多の失敗を重ね辛苦研鑽を積み」と述べ、第九回大会までの長い道のりを思い起こしている。そしてその上で、やっと到達した一つの高みとしてこの大会を位置づけている。岸はその地位を、極東の「日本なるスポーツの一大新興国」と呼ぶ。そしてこの高みに日本があることを、世界各国に認めさせたことを「真の痛快の至り」と高く評価するのである。

さらに岸の眼は、日本の現状確認にとどまることなく、この地位をも

たらした原因をしつかり捉えている。それは「国民元氣の優越性を示すもの」すなわち「勝利」にほかならない。ここにおいて岸は、「勝敗は深く意に介すべきものにあらず」とするいわゆるスポーツマンシップの精神としてしばしば引き合いに出される態度から距離をとり、むしろ列国国民の「隠然深甚なる敬意」をもたらしものとして、「好成績」と勝利に強いこだわりを見せている。そして二年後のロサンゼルス大会に向けて、選手たちに「非常なる覚悟と熱心なる練習」を積み、アムステルダム大会以上の成績をあげるよう強く促して、自説を締めくくっている。総じてこの序言は、スポーツ新興国としての日本の著しい台頭を讃えつつ、さらなる精進を促すことを目的とする激励の弁と読むことが可能である。ここで、岸にとってアイデンティティの核を成す「国家」を「人種」に置き換え、上述した「人種」的ヒエラルヒーにおける日本人の位置づけを論じたものとして読み直しても、あながち的外れとはいえないのではなからうか。そうすることの妥当性は改めて論じることにするが、役員選手団に属する代表たちが、スポーツ大国への道のりと「人種」的ヒエラルヒー上の上昇移動とを切り離しては考えられなかったことは、おそらく間違いない。

岸よりも高い地位から、そしてより包括的に国家を代表し得る立場からの発言が込められたものに、大会直後の一九二八年八月十一日に、内閣総理大臣田中義一から役員選手団に送られた次の祝電がある。

「オリンピック」第九回大会において帝国役員選手諸君一同の奮励努力により未曾有の成績を収め我「スポーツ」の名譽を中外に挙げたるは我國民の誇とする所にして誠に欣快にたえず深くその成功

を祝すると共に諸君の労苦に対し茲に深厚なる謝意を表す⁽²³⁾

田中は、今大会に向けて指導者と選手が積み重ねてきた訓練を「奮励努力」として称え、その結果として「未曾有の成績」がもたらされたことを喜び、またこれを「我国民の誇」として持ち上げ、個人としての心境を「欣快にたえず」と吐露し、その上で「深厚なる謝意」を表明している。謝辞を述べる最高行政官の姿に、オリンピック競技が国民行事として受け入れられ、定着したことの証をみることも、また、田中の抱く「欣快」の心地と「謝意」が国民によつて共有されたものとみなすことも可能であろう。

岸と田中の声明は、アムステルダム五輪を、日本のオリンピック強国としての時代の幕開けを飾る大会として位置付け、またそのような地位に対する国民の覚醒と自覚を裏付けるものであるといえるだろう。

アムステルダム大会で達成した金メダル二個、銀メダル二個、銅メダル一個という成績をそれ以前の大会の記録に照らしてみたら、たしかにそれは「一大新興国」の出現を告げるにふさわしい「未曾有の成績」と呼んでも過言ではない。そしてその後のロサンゼルス大会（金七、銀七、銅四）、ベルリン大会（金六、銀四、銅八）でのメダルラッシュを想起するなら、アムステルダム大会を日本スポーツ界黄金時代の幕開けを告げる大会として位置付けることも可能である。岸の提言と忠告は聞き入れられ、次世代の選手団は見事その期待に応えたのである。

しかし本論は、以下において、メダルに届かなかつた、それゆえ忘却される運命に置かれた選手に焦点を合わせたい。それは、すんでのところでメダルを逸したため、織田、鶴田、人見らメダリストたちの栄光の

陰で長く国民の記憶から置き去りにされたマラソン走者の山田兼松や津田晴一郎である。そして同じ競技でアフリカ系選手として初めて金メダルを手にしたエル・ワフィにも注目する。そのためにはまず、マラソン競技そのものに視点を移すことから始めたい。

Ⅱ. マラソン競技の展開と結果

マラソン競技の起源は、周知のとおり、古代ギリシアにおいてアテネがペルシアを打ち破ったマラトンの戦い後、戦勝の知らせを届けた伝令エウクレスの故事にあるといわれる。エウクレスは、アテネの城門に走り込み、勝利を伝えるなり息を引き取ったという⁽²⁴⁾。かく神話がかった起源を有するこの長距離レースは、近代オリンピックで蘇って以後も今日まで、陸上ファンのみならず、多くの一般人を魅了する競技種目であり続けている。最近でも、C・マクドゥーガルによるベストセラー・ノンフィクション『Born To Run 走るために生まれた』が、長距離二足走能力は人類が固有の進化を遂げた重要な要因であるとする学説を紹介し、話題を呼んだばかりである。

マラソンは今日まで、陸上競技種目のなかで要の位置を占めてきた。オリンピックや世界陸上などの国際大会では、通常最終日に割り当てられ、クライマックスを飾る種目として演出される。一九二八年のアムステルダム大会でも、例にもれず、最終日の八月五日に実施されている。当日は日曜日であり、競技場（スタジアム）は大観衆で膨れ上がり、沿道は見物人で一杯になった。競技場と沿道を結ぶ地点に立てられた塔は、大会におけるこの種目の役割を象徴するかのよう⁽²⁵⁾に、「マラソン塔」と名付けられた。

日本人関係者は、織田幹雄の三段跳び優勝、人見絹枝の八〇〇M準優勝を目の当たりにした興奮さめやらぬ最中に、最終日のマラソンを迎えることになった。有終の美を飾りたいという期待は自ずから高まったであろう。しかし関係者の中には不安を抱くものも少なくなかった。たとえば陸上競技監督の竹内廣三郎は「我が国は今日まで数回マラソンに出場したが、毎回優秀な実力を持って居り乍らこれを發揮し得ずに終わった。今度も亦その例に慣ふのではあるまいかと心配した」と述懐している⁽²⁶⁾。金メダリストの織田自身、竹内の心配を裏付けるかのように、マラソンは「強い強いと言ひながら一度として勝つことのできなかつた」種目であつたと振り返っている⁽²⁷⁾。おそらく二人の脳裏をかすめたのは、日本における「マラソンの父」金栗四三が過去のオリンピック大会で惨敗した光景ではなかつたか。

金栗四三は熊本県出身で、日本マラソン界の草分け的存在ともいえる人物である。一九一一年、ストックホルム大会への予選会では、当時の世界記録を二七分も縮める大記録を打ち立てて関係者の度肝を抜いた。しかし大会本選では、メダルを持ち帰るのではとの高い前評判にもかかわらず、レース途中で日射病に倒れ、無念の途中棄権となつた。その後も二〇年アントワープ大会、二四年パリ大会に連続出場するも、優勝はおろか、入賞さえ果たすことができなかつた⁽²⁸⁾。けれどもマラソンは、日本人選手が初出場した一九一二年以来、毎回出場を果たしてきた種目でもあり、アムステルダム大会では、他種目以上に大きな期待が寄せられていた。

(一) 出場選手と監督

日本陸上界の積年の無念を晴らす最右翼にあつたのは山田兼松である。山田は香川県坂出の出身で、塩田業者の家に生まれた。当時のオリンピック代表選手には大学卒の高等歴者が多かつたなかで、山田は家業の塩田で汗を流す労働者であつた⁽²⁹⁾。幼少期から砂浜を走り回る過酷な作業によつて、強靱な足腰を鍛え上げたといわれる。二七年に開催された阪神国道開通記念クロスカントリーでは独走で首位、二八年のオリンピック予選では堂々優勝を飾るなど、数々の榮譽を経てアムステルダム出場を果たした。

もう一人の代表選手である津田晴一郎は、関西大学予科から慶応義塾大学に進学したエリートである。北欧選手の走りを調査して独自の走法を編み出したため、「科学的走法」の実践者として定評があつた。二八年二月には箱根駅伝で五区をまかされ、オリンピック予選では山田に次いで二位に入った。アムステルダムでは、山田と並んでメダル当確候補と見なされていた。

なお、本選にはもう一人、南満州鉄道株式会社(満鉄)の永谷寿一が出場している、永谷は一〇〇〇Mを専門とする走者であつたが(成績は三三分三一秒〇で一九位)、山田と津田のためにペースメーカーを務めるべく、マラソンに参加した。

竹内廣三郎は、京都師範学校教諭および大阪体育協会主事を務め、日本陸上競技の揺籃時代から選手、コーチとして尽力してきた人物である。マニラでの第七回、上海での第八回極東大会にコーチを務め、その功績が認められてアムステルダム大会の陸上チーム監督に抜擢された。竹内は本選に至るまでの山田と津田の練習の様子を詳細に書き残してい

る。

(二) 大会に至るまで

竹内の記録からは、いくつかの興味深い事実が明らかになる。

まず山田は、アムステルダムに移動する前にけがをしていた。ドイツに滞在してベルリンで行った訓練中に膝の故障で二日間練習を休んだというのである。その回復を待たずアムステルダムに出発したというのが、結果的に、このけがが、本番終盤でのどんでん返しの伏線になったとみることでもできよう。

竹内はけがを抱える選手には行き過ぎともとれる練習に許可を与えている。「冒険なことではあるが」と断りつつ、「大会までに少なくとも一度は全コースを走らせてみたい」との判断から、山田に、好調を維持する津田の傍らで全コースの一部を並走させたのである。全コースとは、スタジアムの「トラックを一周してマラソン塔下の門を通過し場外に出てアムステル河畔に沿って到着点に至りて引返し、再びマラソン門よりトラックに入る全程二六マイル三八五ヤード」のことである。この時津田は、スタミナ切れで練習を中断せざるを得なくなった。そのため、その三日後には二人ともに全コース走破を試みさせている。津田は二回目の挑戦でも、走行を途中で断念したが、山田は疲労の色を見せながらも、二時間四五分五四秒で四二・一九五キロを遂に制覇した。竹内は、「両選手の胸中に強い自信力が燃え出た事は事実である」と満悦の弁を残している。⁽³⁰⁾

(三) 当日スタート前の状況

いよいよ本選当日、大会第八日目の八月五日である。期待のマラソンが開催されるとあって、試合を終えた選手たちは応援団を結成し、コース沿いに持ち場を決め、配置についた。当時の記録からは高まる興奮と期待の強さがひしひしと伝わってくる。「次はマラソンであります、これは陸上競技最後の日であります。そして今日は最後の職場であるから、どうかして山田、津田、永谷の三君に最後の栄冠を得させたい」とは、オリンピック代表役員で工学博士の山本忠興の弁である。⁽³¹⁾三段跳び金メダルで一夜にして国民的英雄の座を射止めた織田幹雄は、人見絹枝、三木義雄（一一〇Mハードル、準決勝落選）らと共に、出発点から約三五〇〇メートルの地点で走者の到来を待ち構えた。⁽³²⁾

マラソンコースの起点で出発の合図を待ち受ける群集の中には、虎視眈々とライバルを見張る竹内がいた。注意力を研ぎ澄まして、山田、津田と勝負を争う人材を見抜こうとしている。競技出場者は二〇数か国を代表する七九名、それを見守るのはスタジアムを埋め尽くした三五〇〇〇人の大観衆である。午後二時四〇分、レース開始が近づくと、出場選手はマラソン塔に近いトラック上に集結した。点呼を終え、国別に縦列をなし、スタートラインにつく。この時竹内は、山田が一週間前に全コースを走破した事実を想起し、やや強気の心持ちだったようである。「いくら楽観することが出来た」と書き記している。⁽³³⁾

竹内は外国人選手一人ひとりを観察した。山田と津田に匹敵するような、実績ある選手は少なかったようだ。しかし、気を緩めることなく「知名の選手は見当たらぬが新進の勇士が潜んでゐるかも知れない」と警戒を続ける。⁽³⁴⁾ 初出場のアメリカ人選手ジョイ・レイ (Joie Ray) が目

に留まる。五〇〇〇M、一〇〇〇〇Mで鍛えた速力は要注意である。一四年前のロンドン大会以来の優勝を期して、アメリカチームが送り込んだ秘密兵器ではないかと竹内は心配した（レイは五位入賞）。近代オリンピック開始以来のマラソン王国フィンランドの選手陣に視線を移す。二四年パリ大会の覇者ステンロースは予選会に敗れて不在。彼に代わって出場している六名には、「おそらく新進気鋭の大ランナーが隠れて居るかもしれない」と、ここでも警戒を緩めない（マルツェリンが三位、コスキイが七位入賞）。新興国のカナダにも気を配り、「ブリッカーの如きも亦マラソンランナーとしての評判が高い」と述べている（ブリッカーは一〇位）。しかしながら、竹内の経験と見識をもってしても、一位、二位を奪うことになるエル・ワフィとM・プラザの名があることはなかった。優勝者、準優勝者は当時の専門家にも予想外の存在だったにちがいない。

午後三時五分、号砲が鳴り響き、選手は一斉に走り出した。白鉢巻をきりりとした山田、津田、永谷三選手は、雄々しい姿でスタジアムを走り出てゆく。

ここからの展開は、大きく分けて序盤、中盤、そして最大の山場である終盤の三部からなる三部構成としてまとめることができる。序盤はめまぐるしく先頭が入れ替わる攻防、中盤は日本人選手の独走、終盤は日本国民を失意の底に陥れた土壇場での逆転劇を、それぞれハイライトとする。⁽³⁵⁾

(四) 序盤戦の攻防

日本の三選手は皆、先頭グループに位置を占め、それぞれが先頭の座

をうかがった。竹内は、マラソン門から場外にでる選手を目撃し、「誠に壮烈の極みである」との言葉を残している。山田は一番、津田は二番、永谷は一四番で、アムステルダム河畔の沿道へと続くコースを驀進する。

竹内は疾走する選手群を自動車で追いかけて、一マイルを過ぎた地点で先頭を切って走る山田と、これに続く津田を視野にとらえ、「全く夢でないか」と悦に入った。山田に無理をしている様子はみられなかった。竹内は「ああ今日は愈々久しく熱望して止まなかった栄光のチャンスが到来するのではなからうか」と期待に胸を膨らませた。⁽³⁶⁾

二マイル地点、フィンランドのクオッカが先頭に立ち、津田、永谷が続き、山田は第十二番目に後退。五マイル地点ではフィンランドのラスタスが先頭を奪い、ドイツのワンデレル、永谷、ベルギーのリンセン、フィンランドのマルツェリンがこれに続く。八マイル地点では、リンセンがリードを奪い、日本三選手が続き、フィンランド四選手がその後を追う。この地点まで、山田と津田は常に首位を狙える位置につけつつ、前にでる機をうかがっていた。

スタートから三五〇〇Mの地点にて、応援団として控えていた織田は、「今来るか今来るかと時計とにらみ合い」をしていた。三時半過ぎ、ついに選手の先頭集団を視界にとらえた。「段々近づいてくるにつれて朝日のマークが先頭に見える。然も三人が並んで走って居るではないか。いよいよ目の前に近づいて見ると皆元気さうだ。唯津田君の顔が少し青いだけ。」織田は、好調そうな日本選手の様子に安堵の胸をなでおろす。「落ち着いて行け」と声援を送るが、ペースの速さを心配せずにはいられなかったとも書き残している。⁽³⁷⁾

(五) 日本人選手の独走

いよいよ中盤、一〇マイルの引返点を迎える。山田が断然先頭に出て、ラスタス、レイ、津田、リンセン、永谷、マルツェリンが追隨する展開となる。一三マイルに至ると、リンセンは足を痛めて落伍し、レイが先頭を奪って一九マイルまで進んだ。しかし山田と津田はスパートをかけてレイを追い抜き、先頭を固めた。これに続くは、マルツェリン、レイ、ブリッカー、永谷はこの辺りで先頭集団から脱落した。

復路で選手を「鶴首して」待つ竹内の目に、白いユニフォームがちらちらと見え始める。山田は拍手と共にトップで現れ、津田が続く。竹内曰く、「何と云ふ痛快なことだ。而も両選手が微笑を含んで相並んで行くではないか。」竹内はメガフォンをとって、「山田、津田あと四〇分だ、しっかりやれ」と激励する。このとき両者は竹内の方を向いて、応じるだけの余裕を残していた。⁽⁸⁾

二一マイル地点、レイは勝負をかけてスパートし、津田、ブリッカーを抜いて山田を五〇ヤード先にとらえた。しかし追い付くことはできず、しばらく山田、レイ、津田、マルツェリン、ブリッカーの順でレースは進む。しかしここで、やや後方から追隨してきたフランスのエル・ワフイとチリのプラザが加速して順位を上げ、津田、マルツェリンの後、第五、第六番目に接近した。

織田は、エル・ワフイとプラザがトップへの接近を開始する地点にいた。先頭のその先を走る「自動自転車」(バイク)が「日本人が先頭」の知らせを届けると、「十番以内で来て呉れればと思ったのに意外にも先頭を切つて居るとは一同跳び上がって喜んだ」という。ついに先頭選手のユニフォームが見える。「まさしく日本。それは山田君である。」し

かし山田は「幾分弱つて居た」との様子である。これにレイが続き、一分ほど遅れてエル・ワフイ、プラザが走り抜けていった。津田は第六位に落ちていた。しかし織田は「第六位までもやって来るとはまるで夢だ」と津田の健闘を喜んだ。だが津田は、しきりに「目が見えない」とうったえていたという。⁽⁹⁾

(六) 土壇場の逆転劇

最後の詰めでの激しい駆け引きを、竹内はみることがなかった。途中運河上のボートからレースを追跡した竹内は、選手に追いつくことができず、ボートを放棄して自動車に乗り、他の道からスタジアムに先着して、山田が一位で戻ってくるのをまっていた。スタジアム周辺は選手を迎えようとする観客で一杯だった。

エル・ワフイはレース最後の一マイルでさらにピッチを上げ、遂に先頭の山田を追い越して一位に、プラザもこれに続いて二番に進んだ。最終四分の一マイルでマルツェリンは山田を抜いて三位へ。マラソン門が開かれ、選手の帰着を告げる号砲が轟く。観衆の眼はマラソン門にきぎ付けとなる。そこに現れたのはエル・ワフイ、続いてプラザ、そしてマルツェリン。上位三者はこの順で、山田は四位、レイと津田がこれに続いてゴールインした。

スタジアムには、上位三者の中に山田を見つけられずに不安を募らせる山本がいた。山田が「途中で倒れたのではないか」とあれこれ心配を巡らしという。曰く、「そこへ入って来たのは実に山田君であったのであります。然し、もう津田君は駄目だろうと諦めてをつたところが、五番目は米国のジョイレイで、六番目に津田君は実に元気で場内へ飛んで

来た。此に於いてマラソン競走では、我が国は四等と六等とを得たのであります。」⁽⁴⁰⁾

山田のタイムは二時間三五分二九秒、永谷も全コースを走破し三時間三分三四秒で四八番だった。

上位一〇名の順位は、結局次の通り。

- 一、エル・ワフィ（フランス）二時間三二分五七秒
- 二、ブラザ（チリ）
- 三、マルツェリン（フィンランド）
- 四、山田兼松（日本）
- 五、レイ（アメリカ）
- 六、津田晴一朗（日本）
- 七、コスキイ（フィンランド）
- 八、フェリス（イギリス）
- 九、ミチエルソン（アメリカ）
- 一〇、ブリッカー（カナダ）

Ⅲ・敗北の原因と評価

ゴール直前の約四〇キロメートル地点まで首位を独走していた山田が、なぜ敗北を喫せねばならなかったのか。その理由は、膝の故障にあった。幼いころから砂浜の塩田で仕事をして鍛え上げた膝関節は、アムステルダム⁽⁴¹⁾の石畳に弱かったというのが、真相である。山田は、ベルリンでの練習中に膝の故障で二日間ほど休みをとり、完治を待たずに全コースを走破するという過重なトレーニングメニューをこなしていた。それが膝への負担を重くしたことも否定できない。

アムステルダム河畔の沿道からスタジアムへと続く走路が、土から石畳に変わってから、山田の速度は急速に低下し、やがてほとんど歩行状態となったという。織田の日記に次のようにある。「あんなに元気さうに見えた山田君はあと二千米という処迄来て急に膝が痛み出してどうしても出ない。其の中にうしろの三人に抜かれてしまった。でも動かぬ足で良くスタディオンを迄持って来たと思ふ。」⁽⁴¹⁾「ゴールを目の前にして、必死に守り抜いてきたトップの座を奪われ、一人また一人と追い抜かれた山田のくやしきはいかばかりであったか。

息をのんでマラソン競技を見守っていた幾萬の観衆は、山田と津田の四位と六位での入賞を、どう受けとめたのか。ある報道記事は、スタジアムの様子を次のように伝える。

次に又髪黒い選手が現れた。今度こそは山田だと思ったがこれもチリのブラザだ。その次は黄色い髪と青い着物はフィンランドのマーテルンであることが分かった。直ぐ次に白い鉢巻が現れた。紛う方なく山田だ。山田の一番を望んで居た日本の応援団は再び君が代を聞くものと思ひ込んで居たので、手をたたいたが気が抜けたたきやうであった。次にアメリカのジョイ・レイが現れた。次の六番はだれだと待つ間もなく現れた姿を見ると津田だ。山田さへ四番になる、彼の一等もぬか喜びとなつたからよもやと思つて居た所なので、日本の応援団は山田の時と違ひ本当に喜んだ。⁽⁴²⁾

「山田の一番を望んで居た日本の応援団は再び君が代を聞くものと思ひ込んで居た」の「再び」とは、三日前の八月二日に、織田幹雄が三段

跳びで優勝した折に、メインポールに日章旗を仰ぎ見つづ聞いた君が代に続いて「再び」という意味である。山田の一位を確信していた観衆にとつて、四位という順位がいかに落胆すべき事態であつたかは「気が抜けたたたきやう」の一言から窺い知ることが出来る。その落胆の度合があまりにも大きかったので、報告されていた通りの六位を津田が守り通したことが、うれしい驚きとなつたにちがいない。それゆえ「日本の応援団は山田の時と違ひ本当に喜んだ」のである。

陸上関係者が残した個々の観察記からも、深い失望の様子が伝わってくる。一位金メダルという大魚を逃したことのショックから立ち直り、四位入賞を甘んじて受け入れ、さらに入賞そのものの価値を積極的に評価するための気持ちの入れ替えに、執筆者たちはそれぞれ、様々な工夫を凝らし、努力を払っている。

監督の竹内は、「山田は最後の二〇〇米まで殆ど先頭を切つて居り乍ら遂に優勝のチャンスを逸した事は返す返す残念であつた」と述べ、無念さをうったえる。しかし次の筆で「併し乍ら両選手ともに平素の實力を十分に發揮して日本マラソンの真価を世界に示した功績は何と云つても偉大なものあつた」と切り替えし、積極的な評価をうちだしている。悔しさをぐつと飲み込み、前向きに再解釈を試みているといえよう。⁽⁴⁾

「スタディオオンに着いて大急ぎで控室に跳び込んだ。結果は意外にも四等と六等である。惜しいと思へば残念だがやむを得ない」と語るのは織田である。スタジアムから離れた場所で応援に立っていたため、ゴールの場面に立ち会えなかった。一位を確信してスタジアムに戻つたところ、予想外の結果に出くわすことになつたわけである。織田は、厳しい

現実に直面し、様々な方法で気分転換をはかった。「運がなかったのだ」として、結果を天に帰してみたり、「二人出て二人入賞した事だけでもう充分である」と数による納得を試みたり、あるいは「此れで日本のマラソンも初めて実力を示す事が出来たと言へる」として、入賞そのものの価値をかみしめたり。さらには、「シヨイレーも其の後ずつと遅れた」と、他国(米国)選手の悲運を思い起こしたり、「我が陸上競技も遂に一五点をあげて世界的に認められる時が来た」として、陸上競技全体の好成績に慰めを見いだそうとしたりもした。だが、結局は腹いっぱい食べるといふ原始的なストレス解消法がもつとも効果的であつたのかも知れない。織田は「凱歌を奏して宿に帰り久しぶりのすき焼きで応援にへつた腹をうんとふくらませた」との記述で、その日の記録を締めくくっている。⁽⁴⁾

代表委員の山本も、総得点一五点という成果に見いだしたようだ。「総決算をしますと、日本は一五点の中一人の優勝者が有る、即ちオリムピックチャンピオンが一人出てゐる為第七位を勝ち得ました」との弁にあるように、優勝者を含む一五点は世界第七位に位置することになるといふ。とりわけ、この計算法によると、当時からその後二〇年近く、日本がもつとも強く意識し、やがて同盟を結ぶにいたるヨーロッパの新興国、すなわちドイツよりも上位にくるといふ事実が、山本にとってなによりの喜びであつた。「ドイツのごときは、点数に於いては日本の上にあります、オリムピック成績に於いては日本よりも下になつたのであります」として、ドイツを下にみることの快感を言葉にしてい⁽⁵⁾

最後に、以上のような陸上関係者よりも、はるかに多くの読者を対象

として記事を書かなければならなかった新聞記者の論法をみておこう。基本的には、織田、山本に共通する「質よりも量」を重んじる路線で筆を走らせている。曰く、「一等はとらないが二人とも入賞したのは日本ばかりだ。」その上で、外国人記者の好意と高評価に言及し、二人入賞の意義を再確認する。曰く、「二人が並んで写真を取る時にスタンドの方々から万歳の声が聞くに、われわれも又付近に居た外国記者の群から握手攻めにされた。」さらには、日本人の強さの秘訣として、固有の精神性、つまり「大和魂」を持ち出している。曰く、「身体は小さいがねばりと底力においては世界を向こうに回しても負けないことを示したものであり又大和魂を形で現したものである。」この主張は、別の機会に見るように、「人種」的ヒエラルヒーにおける日本人の位置を引き上げるためにしばしば導入された精神論と同系であるといえよう。記者は次のように、日本に都合のいい、やや独りよがりの計算法を駆使しながら、記事を締めくくる。「今までスタチアムであまり振るわなかった日本も最後のしかも大物で振るった。二人とも入賞したことは一人の二等若しくは三等に優るものだ。」⁽⁴⁶⁾

しかし、いかなる操作や論法を用いても、行間に潜む失意と無念の情を消し去ることはできない。書き手それぞれの心底に溜まる無念の思いを感取することは容易である。初金メダルを逸した痛みを簡単に癒すことはできるはずもなかった。(今日まで日本男子マラソン界が金メダルと無縁であることから、その重みを実感することができよう。) アムステルダムマラソンに関する記述に、勝者エル・ワフィに関する情報が少ないのは、執筆者たちが失メダルショックからなかなか立ち直れなかったことの間接的な証拠になるかもしれない。執筆者たちは、メダルを

取れなかったことへのこだわりを心に奪われ、真の勝者が誰たるかを想起するだけのゆとりを保ちえなかったのではないか。

IV. 勝者エル・ワフィに対するまなざし

それでも、当時の記録にエル・ワフィの関する言説や表象を探そうとする努力は不可能ではない。其処ここにある断片的な証拠を集めながら、以下において、そのためのささやかな試みを提示したい。まずは日本人による記述や描写を検討する前に、他国におけるエル・ワフィおよびその記憶のその後を一瞥しておきたい。

エル・ワフィの祖国――より正確には祖国アルジェリアの宗主国――フランスでは、植民地主義という政治的な緊張を伴う関係性も手伝って、エル・ワフィ個人にスポットをあてる報道は回避される傾向がみられた。これは、同じ大会でメダルを獲得した、歴史的、文化的出自を宗主国フランスとする選手と比較するとたちまち明らかとなる。「有色」選手が「白人」国家の代表であるという事実が、日本人の役員や選手を少なからず混乱させたことは容易に想像できる。その後エル・ワフィは、以下に見るアメリカでの興行的な長距離走試合に出場した結果、アマチュア資格を剥奪されると、その走力に再び脚光を浴びさせる機会もなく、国民から忘れ去られる運命に置かれた。⁽⁴⁷⁾

祖国チリで英雄として迎えられた準優勝者プラザは、フランスにおける勝利のゴール以後のエル・ワフィと対照的な生涯を送ったといえるだろう。プラザは、その後も国民の注目の中に、経済的にも社会的にも成功した人生を送ることになる。南アメリカで近代国民国家としての制度の発展を急速に遂げつつあったチリは、東アジアにおける日本とある程

度共通した歴史的な位置におかれていたといえる。その意味では、アムステルダム大会後のプラザのキャリアは、山田と津田がメダリストとしての栄光を手にしていただければ約束されたであろう生活を推し量るための参考になるかもしれない。また、チリの世論やメディアは、成績で祖国の英雄を上回ったエル・ワファイに対して、まったくといっていいほど敬意や注意を払わなかったことに留意したい。それが、果たして「人種」主義によるのか、あるいは植民地主義によるのか、これらの点を含めチリ人のエル・ワファイに対する態度については、さらなる検討が必要である。⁽⁴⁸⁾

自国選手を第五位に入賞させたアメリカは、日本を含むどの他国よりも、エル・ワファイに熱い視線を送った。「有色人」であるエル・ワファイの勝利は、アメリカ社会の「人種」的ヒエラルヒーを批判的に再検討する国際的な学術会議と、時をほぼ同じくして起こった出来事であったため、ニューヨークタイムスなどの主要紙は、反人種主義的な論陣を張った。このような動きに、多民族国家ならではの特長をみることも可能かもしれない。アメリカの実業家は、エル・ワファイの長距離走行能力に対する国民の関心に乗じて、アムステルダム大会金メダリストを自国に招き、他の有力選手との数度に渡る興行試合を主催した。興行は必ずしも成功とはいえなかったが、エル・ワファイは渡米によって十分な報酬を手にした。しかしその結果、すでに述べたように、アマチュア選手の資格を剥奪された。アメリカ人のアフリカ人に対する開かれた姿勢が、彼ら選手生命の終わりをもたらしたことは皮肉と言わざるを得ない。⁽⁴⁹⁾

では、我が国における優勝者エル・ワファイへのまなざしはどうだったのか。フランス人やチリ人と同じように、彼を忘却の彼方に追いやった

のか。それとも、アメリカ人のように人間として、「人種」としての彼とその才能に興味を示し、あるいは敬意を払ったのか。

「人種」的な観点からいうなら、国籍やエスニシティ的な差異による「他者性」と、いわゆる「有色性」の共有がもたらす「連帯」の感覚や意識との間に、一種不安定でどっちつかずの状況が生じていたことが想像される。このような観点から、エル・ワファイに対する印象、評価、意見を掘り下げるアプローチが有効であろう。

一例として、アムステルダム大会の様子を報道する『朝日新聞』夕刊に掲載されたエル・ワファイの紹介記事を組上に載せてみる。

オリムピック陸上最終のマラソンに第一着の栄冠を占めたエル・ワファイとは仏領アルゼリア（アフリカ）のビスカラ付近から来た廿九歳のアラビア土人である。同人は元仏領アルゼリア駐屯軍に雇われて信書を運ぶ役目を命ぜられ自然長距離走法を自得したもので、その後轉じてパリに來りある自動車会社に雇われてゐるものを拾いあげてマラソン選手に仕立てたもので、今回の結果を見てマラソン界に一新人を加えた譯である、エル・ワファイは記者に対して本日の競走の感想を述べた中に日本選手の奮闘ぶりを賞賛したが日本選手はスタートから余り焦りがちに過ぎた観があると語つて居た。⁽⁵⁰⁾

論調は概して中立的である。記者はエル・ワファイにインタビューをおこなったようだが、インタビューをすること自体、勝者への敬意のあらわれと受け取ることもできよう。「日本選手はスタートから余り焦りがちに過ぎた観がある」とのアドバイスを敗者におくる態度についての筆

致は、王者の貫録を伝えようとする意図さえ感じさせる。しかし気になる表現がないわけでもない。「アラビア土人」という表現は特に重要である。明治初期以来、「土民」とならんで「土人」は、当時日本人が「未開」や「野蠻」であるときみなした地域に住む人々を指す一般的な呼称であった。したがって、あきらかに軽蔑的な心情を伴う語であったと見なすことができる。⁽⁵¹⁾「雇われてゐるものを拾い上げて」や「マラソン選手に仕立てたもの」などは、人を物として扱おうような言葉遣いといえなくもない。欧米の「白人」選手を対象とした場合も、記者がこのような表現を用いるとは考えにくい。厳密な検証は別の機会に譲るが、この記事は、マラソン王者を見上げる姿勢と見下す姿勢の両者を想定し得る手がかりで一杯である。

ヨーロッパ諸国の人々（「白人」）から見た場合の「非白人」としての「有色性」の共有が、日本人のエル・ワファイに対する感情や印象に影響を与えることはなかったであろうか。入手した証拠だけでこの点を検証することは困難だが、検討の糸口を探ることは可能である。たとえば当日の記録は、オリンピックマラソン競技の勝者を決する檜舞台で、スタジアムを埋め尽くす大観衆が、エル・ワファイを日本人と誤解した可能性を示唆している。栄光の勝者を自国民と見間違ふ大勢の人々を前に、日本人関係者は意表をつかれ、当惑したにちがいない。日本人のエル・ワファイに対する印象や評価を掘り下げるための切り口として、この事件を取り上げみたい。

マラソンレースがいよいよクライマックスを迎えようとしていたとき、スタジアムには、選手の帰還を今か今かと待ち受ける大観衆がいた。そして不幸にも、大観衆には一位と二位が日本人であるという誤っ

た情報が与えられていた。情報伝達手段が未発達であった当時、スタジアムへの経過報告は、レースコースの各中継所での順位をスタジアムの掲示板に提示するという手段によって行われていた。レースの終盤までトップの座を守っていたのは二人の日本人だったので、掲示板の一位、二位の番号も、山田と津田の番号のままだったのである。二人の日本人がトップを争って入場してくる光景を期待して待つ大観衆の様子を、竹内は状況を次のように描写している。

スタディオンの掲示場には各関所の通過順序が選手番号によって掲示されてある。二六四番が第一等に、続いて二六〇が第二等に掲げられて居る。いわずもがな山田と津田の番号だ。マラソン出発以来二時間半スタンド幾萬の観衆がプログラムと対照して我選手であることを知るに及び、場内は日本人で大騒ぎである。⁽⁵²⁾

エル・ワファイが黒髪で小柄であったことも災いした。身体的特徴からだけでは、遠目には日本人でさえアジア人と見分けられなかったかもしれない。接近したとしても、ヨーロッパ人では、エル・ワファイと日本人の違いがよくわからなかったであろう。エル・ワファイがスタジアムに入場すると「ジャパン、ジャパン」の大歓声があがったと報道は伝える。だがそれはいたしかなかった。

五時三五分ラッパが三度鳴ってマラソンの門が開かれた、塔からは盛んに煙があがる。間もなく選手が帰ってくるのだ。人々は固唾をのんで待つ。今までの掲示では山田が一番だが、五分ほど過ぎて

門に髪の毛の黒い姿が現れた。人々は「ジャパンジャパン」と叫んだが、近づいて見るとフランスの選手であるが黒いのも当たり前、アラビア種のアルゼリヤ人エル・ワフイ。⁽⁵³⁾

大観衆に囲まれて、少数の日本人もいた。山本もその一人だった。日本人関係者は、すぐに山田ではないことに気づいた。しかし観衆の誤解を解くすべをもたなかった。誤解を解こうとする強い意欲を持ちえたかどうかとも不確かである。山本の次の手記は、なすすべのない様子をよく伝えている。

私達はランチに乗っていましたが、到底これでは駄目だと思ったのでそれをすて、自動車で先まはりをして競技場に引返し、山田君の一等となって帰ってくるのを待ちに待っていました。そして今日こそは最後だから、山田君を胴上げして場内を廻ろうと、日章旗を持って山田君の帰るのを待つてゐたが、愈々一番に到着した選手は、山田君にあらずして仏蘭西の選手であった。私は残念だったが、西洋人は皆ジャポン、ジャポン・・・と口々に叫んでいます。誰もその日の勝利者は山田君と思つてゐたのです。あれはフランス人だといくら云つても信じない。⁽⁵⁴⁾

金メダリストの織田は、ゴール場面に立ち会うことができなかつた。応援地点でかなり遅れて走る永谷の姿を認め、全走者が通過するのを待ち、それから日本の自動車に拾ってもらい、急いでスタジアムに戻つた。途上、周りは日本の勝利ムード一色であつたと証言している。誤解

はスタジアムの中だけでなく、その周辺にも広がっており、それが誤解だと知らなかつた織田は感無量になつた。

五十人位来たと思つた時永谷君が来た。一度も練習をやらさずして最後迄走り通す其の元気には驚かされた。然も後で聞けば引き返し点まで第一位にあつたと言ふ事だ。全部通り過ぎてしばらくして日本の自動車が出来て其れに乗せられてスタデイオンに向かつた。見物の人々はすべて日本の勝利に拍手を送つて呉れて此んな愉快な気持はなかつた。⁽⁵⁵⁾

織田は日本の勝利を確信したまま選手控室に駆け込み、そこで失意のどん底にある山田と対面することになるのである。

アフリカ人と日本人の混同という「人種」的観点からみてきわめて興味深いこの珍事に立ち会つた人々の心境は、いかなるものであつたか。まず、深い喪失感があつたことはまちがいない。金メダルの獲得という二重の快挙、まさしく「オリンピックの夢」とでもいふべき偉業の達成を、成就目前でしくじつたことの精神的打撃ははかりしれない。ほぼ同時に、誤解されているという事実そのものへの反応、つまり真実が知られていないことへの違和感とそれを正したいという正義感あるいは義務感とでもいふべき意識の動きが、おそらく生じていたであろうと思われる。「日本人とアフリカ人」が、あるいは「黄人と黒人」が混同されたことにたいする反応は、おそらく以上の二つの即座的、直截的な心の動きの後に、あるいはそれとは違う心のレベルで作動するものではないか。

入手した限りの証拠から、このレベルでの意識の動きを読み取ることが困難である。残念ながら、想像力を逞しくしても手掛かりを得られる見通しは立ちそうにない。さらなる調査によって視野を広げ、冒頭で説明したフレームワークの中で「人種」表象に迫ることを、機を改めて取り組むべき課題として提起し、とりあえず本論を結ぶものとする。

註

(1) 単純に順位だけをみるなら、一九六四年東京オリンピックでの円谷幸吉(三位)、一九六八年メキシコオリンピックでの君原健二(二位)らのほうが、本論で取り上げる山田兼松(四位)よりも金メダルに近かったというべきかもしれない。しかし山田はゴール直前まで首位を独走しており、その点で特筆に値すると思われる。

(2) 「人種」と「黒人」という言葉・概念を使用することに対する本論の立場は、先行研究で説明した通りである。すなわち、「人種」に生物学的根拠がないことが明らかとなった今日、「人種」は定義不可能な言葉として、また「人種」の一つとされる「黒人」は、差別用語として警戒されているが、その反面「人種」と「黒人」は社会的現実を伴う概念として、日本を含む世界の幅広い地域で使用されており、批判的な立場からであるにせよ、これらの言葉・概念を用いず、こうした状況に言及し、またそれについて論じることは不可能であるというものである。このような立場から、二つの言葉・概念と距離を置くために、引用以外で単独で用いる場合は、「」を付すものとする。なお、上でいう先行研究とは、『黒人身体能力神話』浸透度の文化的格差をさぐる―概念規定と方法論を中心に―『武蔵大学人文学会雑誌』第四〇巻第四号二〇〇九年のことである。第一節を参照のこと。

また本論は、「黒人」を、「アフリカに出自を有する人およびその子孫で、英語の『ブラック (black)』に該当する人々」と定義する。「黒人」の中でも、一七世紀から一九世紀にかけて全盛を迎えた奴隷貿易によってアフリカ大陸から南北アメリカ大陸へと強制的に移送されたアフリカ人の子孫には、一部のスポーツ競技種目において傑出した役割を果たし

てきた、つまり「黒人身体能力神話」の主役として活躍してきたものが少なくない。歴史を振り返るなら、これらの人々の呼称として、「ネグロイド (Negroid)」、「ニグロ (Negro あるいは negro)」、「有色人 (Person of color)」、「アフリカ系アメリカ人 (African American)」など様々な表現が用いられてきたことが知られている。いずれも、時代の文脈の中で政治的、学術的、社会的に批判を受けた経緯がある。

(3) 本プロジェクトの目的および内容の詳細については、最初に発表した論文、『黒人身体能力神話』浸透度の文化的格差をさぐる―概念規定と方法論を中心に―を参照。

(4) 「神話」の歴史性を検証する作業では、特に一九三〇年代にその起源を求める解釈が有力視されているが、こうした先行研究の成果を視野に入れつつ、さらに踏み込んだ分析が要請されている。ここでいう第一の立場からの成果として次がある。拙稿『黒人身体能力』と水泳、陸上競技、アメリカンスポーツ―「神話」の歴史性を検証するための試論的思考として―『武蔵大学人文学会雑誌』第四一巻第四号二〇一〇年。

(5) ここで問われるべきは、「神話」の歴史性や時代の文脈におけるその性質であると同時に、否それ以上に、「量的」あるいは「比率的」に極端に肯定的な態度が強い展開のありかたである。たとえばアメリカでは、人種主義に対する警戒や統制ゆえに「神話」はタブーと化し、少なくとも公的な舞台で認知されることは皆無といってもよい。他方日本では、人種主義に対して比較的鈍感な文化的土壌も手伝って、「神話」が一方的に承認されることはあっても、批判的観点から粗上に載せられることは滅多にない。実際日本では、指導的立場にあるものでさえ、「神話」を前提として発言することが多い。陸上短距離種目のコーチングでは、「黒人の天性」に対抗するには、日本人は「技能 (スキル)」を磨く以外にない」と教えられると聞く。「黒人だから強い」という言説に潜む人種主義を指摘するだけで「褒めてなぜ悪い」、「事実だから仕方ない」といった反論を受けることも少なくない。

(6) まず、問題の所在を明示するために、「黒人」、「身体能力」、「神話」などの主要概念に定義を与えると同時に、文献調査や意識調査の結果を紹介し、日米間の神話に対する意識や態度の差異の度合を明らかにした。その差異を要約するなら、「アメリカにおいては、黒人が固有の運動能力、あるいはそれより広い意味での身体的な力を有するかどうかをめぐって世論が、三対七から五対五の割合で分裂し、他方日本においてはそ

れが争点たりえず、むしろ所与の想定として、半世紀近くに渡って安定的に維持されてきた」ということになろう（拙稿『黒人身体能力神話』浸透度の文化的格差をさぐる」六一―頁参照）。次に、研究調査の方法論を詳述し、日米のインフォーマントに対するアンケートと聞き取りの結果に基づいて、日本で神話が無批判に受容される過程を解明するために検討すべき経験領域として、一、実際の「黒人」との遭遇、二、「人種」や「黒人」という言葉・概念との遭遇とその習得、三、これらの言葉・概念の公的教育カリキュラムによる学習、四、「神話」を支持するに至った契機と体験の四者を設定した（同上、一九―二二頁参照）。さらに、第一の経験領域に関して、その経験が、身体能力神話とは縁の浅い領域で展開していることを検証することによって、神話の起源を現時点での日常生活ではなく、過去に遡って、年少期からの生育過程に求める必要性を確認した（拙稿「黒い肌の『異人種』との遭遇―『黒人身体能力神話』浸透度の文化的格差をさぐるための序論的考察として―」『武蔵大学総合研究所紀要』第一八号二〇〇九年）。

二〇一〇年、ほぼ時期を同じくして執筆にあたった二つの論文では、右で述べた第二の経験領域、すなわち「人種」や「黒人」という言葉・概念との遭遇とその習得」に関する日本人とアメリカ人それぞれのインフォーマントの経験を、アンケートと聞き取りの結果に基づいて掘り起こし、分析を試みた。拙稿「日本社会における『黒人身体能力神話』の受容―『人種』／『黒人』という言葉・概念との遭遇とその習得を中心に―」『京都大学人文科学研究所』『人文学報』第一〇〇号（二〇一一年出版予定）、および「黒人身体能力」に対するアメリカ人の認否のダイナミクス―『人種』／『黒人』という言葉・概念との遭遇とその習得を中心に―」『武蔵大学総合研究所紀要』第一九号二〇一〇年。

本論とほぼ時を同じく執筆にあたった次の論文では、日本の小学校・中学校教育における「人種」と「黒人」の学習と定着に焦点を当てている。「日本の小学校・中学校における『人種』・『黒人』観の形成と定着―学習指導の内容と知識の習得を中心に―」『武蔵大学人文学会雑誌』第四二巻第三・四号二〇一一年。

(7) むろんここでいう「序列」は、制度的、客観的に存在するものではなく、あくまでも意識や思考上の概念であるにすぎない。そのような概念の存在は、すでに歴史学、人類学をはじめとする諸々の先行研究が裏付けるところであるが、本論で繰り返し言及する「人種の序列」あるいは「人

種的ヒエラルヒー」なるものを指定するために、機を改めて議論をしなればならないと考えている。

(8) Michael Omi & Howard Winant, *Racial Formation in the United States: From the 1960s to the 1990s* (Routledge, 1986 [first edition], 1994 [second edition]).

(9) 竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う 西洋的パラダイムを越えて』人文書院二〇〇五年。本書において竹沢は、西洋中心的なパラダイムの批判した上で、「小文字の race」、「大文字の Race」、「抵抗の人種 (RR)」の三つからなるモデルを提唱している。

(10) ただし、予防線を張る意図を兼ねて述べておくなら、「身体能力」という切り口が、独自である反面、人種の序列の一部分を扱うものに過ぎないことは認めなければならない。この部分と全体がどのようにかわるかについては、別途考察しなければならない。

(11) Mark Dyreson, "Introduction," *Forum The 1928 Olympic Marathon*, *Journal of Sport History* Volume 36, Number 1, Spring 2009, pp. 1-2.

(12) アムステルダム大会以前の七大会におけるマラソン競技メダリストの国籍は、ギリシア（一八九六年）、フランス（一九〇〇年）、アメリカ（一九〇四年）、アメリカ（一九〇八年）、南アフリカ（一九二二年）、フィンランド（一九二〇年）、フィンランド（一九二四年）である。いずれの選手もヨーロッパ系のいわゆる「白人」であった。

(13) 当時の文書では「アルゼリア」とあるが、本論では「アルジェリア」を用いる。ほかに表記ゆれが生じる場合があるが、昭和初期当時と現代の表記の差がやむを得ずもたらす結果であることを断っておく。エル・ワフィを「黒人」と呼べるかどうかは微妙な問題である。アルジェリア人を「黒人」とはいえないとする主張も、一定の根拠を有している。このこと自体が三人種区分の恣意性とあいまいさの証拠であるといえるが、ここでは深く立ち入らないこととする。

(14) アジア人としての自己を日本人が「黄色い人種」として自覚していたことは、当時の記録からも確認できる。ここでは、便宜的に「黄人」という言葉を用いておく。「コーカソイド」、「モンゴロイド」、「ネグロイド」による三分類のうち「モンゴロイド」にあたる。

(15) 山室信一「思想課題としてのアジア 基軸・連鎖・投企」岩波書店二〇〇一年五六頁。

(16) クリストファー・マクドゥーガル著 近藤隆文訳 『Born to Run: 走る

- ために生まれた」NHK出版局二〇一〇年では二足による長距離走行が人類の進化に果たした役割について興味深い議論を展開している。
- (17) オリピックの歴史に関する書籍は数多い。たとえば、財団法人日本オリピック委員会監修『近代オリピック一〇〇年の歩み』ベースボール・マガジン社一九九四年等。
- (18) すなわち次のような諸点である。「黒人」と「黄人」の勝利は、「人種」的ヒエラルヒーの連続性と変化という歴史的な脈絡において、どのような意義を有し、あるいはいかなる位置を占め得たのか。オリピックアスリートの勝利は、この脈絡そのものに影響を及ぼし、あるいは作用を与え得たのか。もう一步踏み込んでいうなら、脈絡そのものを混乱させ、変動を生じさせ得たのか。
- (19) その前年の一九一一年に、東洋で初めて国際オリピック委員会（IIOC）委員の任に就いていた嘉納治五郎らは、大日本体育協会を設立した。この協会が選手派遣の母体となった。
- (20) 人見に関する文献は数多い。人見自身の著書もあり、彼女の生涯を知る重要な情報源となっている。原著としては『スパイクの跡』平凡社一九二九年、『ゴールに入る』一成社一九三一年などもある。
- (21) 中村敏雄「異文化との接点で」『現代スポーツ評論』四二〇〇一年八月頁。
- (22) 岸清一「序言」『第九回国際オリピック競技大会報告書』一九二八年アムステルダム」財団法人 大日本体育協会 昭和五年四月。なお、アムステルダム大会の一次資料はまだこれから発掘しなければならぬが、ここまではアーカイブとして千駄ヶ谷の国立競技場内にある秩父宮記念スポーツ図書館を利用していただいた。記して感謝したい。
- (23) 田中義一「祝電」『第九回国際オリピック競技大会報告書』一九二八年アムステルダム」財団法人 大日本体育協会 昭和三年八月。
- (24) 村川堅太郎「オリピア」岩波新書 一九六三年。
- (25) 山本忠興「所感」『第九回国際オリピック競技大会報告書』一九二八年アムステルダム」財団法人 大日本体育協会。
- (26) 竹内廣三郎「第九回国際オリピック大会陸上競技出場選手報告」『第九回国際オリピック競技大会報告書』一九二八年アムステルダム」財団法人 大日本体育協会。
- (27) 織田幹雄『織田幹雄日記から 陸上競技ヨーロッパ転戦記 へ日本は強かった』有斐閣アカデミア二〇〇一年。
- (28) 豊福一喜・長谷川孝道著『走れ二五万キロ マラソンの父金栗四三伝』講談社一九六一年。
- (29) アムステルダム大会出場者には、後年著書や回想録を出版するものが少なくないが、山田に関する資料は数少なく、人物像を浮かび上がらせることは容易ではない。数少ない資料の一つに「あっぱれ香川人物伝 山田兼松」『香川さぬき野』冬二〇〇六年一六号がある。
- (30) 竹内廣三郎（二〇）ベルリンでの練習」『第九回国際オリピック大会陸上競技出場選手報告』『第九回国際オリピック競技大会報告書』一九二八年アムステルダム」財団法人 大日本体育協会。
- (31) 山本忠興「所感」。
- (32) 織田幹雄『織田幹雄日記から』七九頁。
- (33) 竹内廣三郎（二六）競技開始さる」『第九回国際オリピック大会陸上競技出場選手報告』。
- (34) 同上。
- (35) 以下のマラソン競技の概況は、注の文献以外に、朝日新聞昭和三年八月七日夕刊の記事に基づいている。
- (36) 竹内廣三郎（二六）競技開始さる」『第九回国際オリピック大会陸上競技出場選手報告』。
- (37) 織田幹雄『織田幹雄日記から』。
- (38) 竹内廣三郎（二六）競技開始さる」。
- (39) 織田幹雄『織田幹雄日記から』。
- (40) 山本忠興「所感」。
- (41) 織田幹雄『織田幹雄日記から』。
- (42) 朝日新聞昭和三年八月七日夕刊。
- (43) 竹内廣三郎（二六）競技開始さる」。
- (44) 織田幹雄『織田幹雄日記から』。
- (45) 山本忠興「所感」。
- (46) 朝日新聞昭和三年八月七日夕刊。
- (47) Thierry Terret & Anne Roger. "Managing Colonial Contradictions: French Attitudes toward El Ouafi's 1928 Olympic Victory." *Forum The 1928 Olympic Marathon. Journal of Sport History* Volume 36, Number 1, Spring 2009, pp. 3-18.
- (48) Cesar R. Torres. "A Golden Second Place: Manuel Plaza in South America." *Forum The 1928 Olympic Marathon. Journal of Sport History* Volume 36, Number 1, Spring 2009, pp. 43-72.

- (49) Mark Dyreson, "Imperishable Sports History? Interpreting El Quafi in the United States and Mexico," "Forum The 1928 Olympic Marathon," *Journal of Sport History* Volume 36, Number 1, Spring 2009, pp. 19-41.
- (50) 朝日新聞昭和三年八月七日夕刊。
- (51) 本論冒頭で断ったように、この点を含め、マラソン競技全般に対する解
釈的な問題は、機会を改めて扱うものとする。
- (52) 竹内廣三郎「(一六) 競技開始する」。
- (53) 朝日新聞昭和三年八月七日夕刊。
- (54) 山本忠興「所感」。
- (55) 織田幹雄『織田幹雄日記から』。